

# 苦悩する三文文士

安部 正敏

医療法人社団 廣仁会 札幌皮膚科クリニック院長

ワークライフバランスの理解はむずかしい。識者によると“仕事と生活のバランスがとれた状態”であるらしいが、その線引きは甚だ困難である。皮膚科医にとってたとえば“診療”は前者であり、“旅行”は後者である。しかし、筆者は何を隠そう皮膚科がチョッピリ得意な鉄道評論家を自任しており、事実『皮膚科の臨床』（金原出版）で「憧鉄雑感」なる鉄道と皮膚を関連づけた駄文を連載させていただいている。もったいないことに同社からはわずかながらの稿料（無論、本誌『皮膚病診療』連載であれば100倍の金額が支給されよう）を拝受しており、一応三文文士として、ならばこれはワークである。いやしくも三文文士は原稿用紙3枚などアッという間に書き上げるが、そのネタ探しは、旅行中はもちろん、食事中、果てには夢の中まで行われるためライフに大いに食い込む。さらにこの三文文士はあろうことか『Visual Dermatology』（学研メディカル秀潤社）の編集委員を仰せつかっており、アカデミックな眼力が皆無であるため、少しでも読者の興味を引こうと、そのネタ探しはほかの先生方との会食中はもちろん、雑談中にも行われ、やはりワークがライフの部分に大いに食い込む。しかし、これら異種ともいえるワークは、筆者自身の人生に彩りを添えライフを豊かにするものである。

このような三文文士もヒョッコ皮膚科医のころはそのライフをほとんどワークに捧げた。いまの時代にはそぐわないかもしれぬが、それは患者への畏敬の念や皮膚科学の碩学を知る貴重なワークであった。残念ながらいまに至るまで筆者はそれらの真髄を習得できずにいるが、病棟べったりの研修医時代、臨床との両立が求められた大学院時代、雑用に明け暮れた大学医局長時代……振り返って後悔はない。いや多分ない。きっとない。ない



んじゃないかな？ ないことにしておこう。ワークとライフのバランスはそのときどき変化し正解はなく、案外過ぎてから美化するものであるのかもしれぬ。大切なのはその瞬間にそれらのバランスを吟味することであろう。と、偉そうな記載をしながら、せっかく本誌からいただいたこのリレーエッセイに自ら関係する他雑誌をデカデカと記載するなど、三文文士は『皮膚病診療』編集部が本稿を即刻ボツにしないか気が気ではない。その貴重な時間はワーク？ ライフ？ やっぱりワークライフバランスの実践はむずかしい。